

【一般口演4】 第13席

『四庫全書総目提要』の医書観

宮城 松木 きか

『四庫全書総目提要』（以下『四庫提要』と略称する）は、乾隆37年（1772）に、奉勅により紀昀らによって作られた『四庫全書』の解題であり、各種の総論のほか、書名や著者略伝を記している。

遡って『漢書』藝文志の方技略は、さらに医経・経方・房中・神仙の4者に分類していた。それ以降、歴代の史志書目における医書の分類内には、必ず房中・神仙という道家の範疇に属すると思われる書名も収録されてきている。ところが『四庫全書総目提要』は、子部医家類の小序において「『漢志』医経・経方二家後、有房中・神仙二家、後人誤読為一、故服餌導引、岐途頗雜、今悉删除」と言い、『漢志』の方技略の前半のみを医書とし道家を分離する方針を取った。

本発表は、『四庫提要』医家類を対象とし、医書の選択・配列や評価について検討し、道家との関わりのみならず、『四庫提要』がどのような医書観を持っていたのかを明らかにしようと試みるものである。